

## Ecological Modernization/Treadmill of Production と環境制御システム論の比較

### 環境制御システム論の再検討・2

関東学院大学 湯浅陽一

#### 1 目的

この報告の目的は、Ecological Modernization Theory(EMT)と Treadmill of Production(ToP)の2つの理論と環境制御システム論を比較する作業を行ない、①これらの理論の関係を整理しつつ、②後者の理論の深化を図り、③前2者の理論に対する知見の提示の可能性を探ることにある。

日本の環境社会学理論の1つである環境制御システム論は、現在、「英語圏」での主要な環境社会学の理論となっている EMT と類似点が多い。この点は、双方の論者がお互いに認識している (船橋 2016)。しかし、その異同を明らかにする取り組みは行われてこなかった。

EMT は、その普及とともに他の理論的潮流から多くの批判を受けており、それを踏まえた修正も加られている。なかでも意識されているのが、EMT の台頭以前に英語圏における環境社会学の主要理論であった「生産の踏み車論」(ToP) である。これら3つの理論を比較することは、国内外の環境社会学理論の発展において不可欠な作業である。

#### 2 方法

そこで本報告では、EMT、ToP および環境制御システム論について、Arthur Mol や Allan Schnaiberg、船橋晴俊などの主要論者による文献を取り上げ、整理・比較する方法をとる。

#### 3 結果

比較の結果、EMT と ToP のあいだの相違点として、①ToP が 70 年代にアメリカで誕生したのに対し、EMT は 80 年代以降にヨーロッパ (とくにオランダ・ドイツ) を中心に展開された点、②ToP が「ネオ・マルクス主義的」と呼ばれ、資本主義(capitalism)の問題点に繰り返し言及している一方、EMT は超産業化(super industrialization)の語を多用している点などを挙げるができる。

環境制御システム論については、これらの理論との比較において、EMT と ToP という2つの理論の特徴を合わせ持っている点が指摘できる。環境制御システム論は協働連関の両義性論を理論的基礎としている。本報告での分析をふまえると、EMT は、環境問題を両義性論における経営システムの問題として把握している理論、ToP は、支配システムの問題として把握している理論と位置づけることができる。それゆえに経営システムと支配システムの連動のあり方を軸とする環境制御システム論は、双方の理論にまたがって構想されていると言える。一方、環境制御システム論には、これらの理論と比べ、①市場についての分析が十分に展開されていない、②国際的な環境問題についての考察も未展開である、などの課題も残されている。

#### 4 結論

以上の比較による考察を踏まえると、EMT が重視している「環境的合理性の成立可能性」は、環境制御システムの経済システムへの介入メカニズムを結びつけることで、理論的な裏付けを得ることができる。これにより環境制御システム論が持つ射程を明らかにしながら、EMT・ToP との接続を試み、EMT と ToP をめぐる海外でのこれまでの論争に対して新たな視点を提示していくことができる。

#### 参考文献

船橋晴俊 (堀川三郎編集)、2016、「日本環境社会学の理論的自覚とその自立性」『社会志林』Vol.62.4:21-33